

1998 年度ワークショップ報告要旨

(B) 初歩のロシア語教育

笹尾 道子 (岩手大)

ワークショップ「初歩のロシア語教育」では、7名の方々の報告を受けた後、討論を行った。

全国的にロシア語履修者が減少し、必修単位数が削減される中で、いかにロシア語への関心を高め、履修生を増やすか、いかに授業の効率化・活性化をはかり、ロシア語学習の成果をあげていくかがますます大事になってきている。そのために熱心に取り組んでおられる方々のさまざまな苦心、工夫について報告が行われた。

歌を息抜きのための脇役でなく中心に据えた授業、理系学生の興味を引くためのコンピュータの利用、耳と身体を使った学習法、通訳訓練法にヒントを得た口頭訓練法、課外サークル活動を組織し授業を活性化させた例など興味深い報告が続いた。

しかし1人持ち時間10分の制約の中では、詳しい説明や実演を省略せざるを得ず、聞く方としては物足りなさが残し、まことに残念だった。討論の中では、ワークショップでの個々の発表がさらに深められるようにするにはどうしたら良いか、テーマをもっとしぼった形にできないものか等の意見が出された。

ロシア語教育に関するワークショップがスタートして3年が過ぎた。この問題をこれからもワークショップのテーマのひとつとしていくのが良いのか、研究部会としてしっかりした位置づけをしていくのが良いのか、この辺で検討し直してみる必要がある。

セメスター制度導入と第二外国語教育

岩原 宏子 (北海道東海大)

最近多くの大学でセメスター制度が導入されているが、本学でも1997年度からこの制度が始まった。報告では、セメスター制度導入にともなって本学の第二外国語(ロシア語)教育で生じている問題点を指摘した。まとめると、①学生の選択の自由度が増した半面、一つの言語に定着しない、②学生の履修目的・要求を見極めるのがより困難になった、③指導内容が浅くなる、などである。

また、学生の学力の多様化に対応するため、授業内容に工夫をこらさなければならない。成人の外国語学習には文法の習得が不可欠だが、最近文法を説明してもついてこれない学生も多い。なるべく平易に、そして楽しく文法を学べるように、授業のなかでゲームなどを取り入れている。

報告では、一例として、完了体と不完了体の概念(過去)を理解させるためのゲームの例を紹介した。ある事件が起きて、その犯人を捜すための尋問という設定で、容疑者たちがアリバイについて述べる。「過去の事実」を述べる際の完了体と不完了体の使い分けを説明できる。